

読書カフェ

私のとおきの一冊
～歴史のたのしみ～



DOKUSYO CAFE
VOL.1



「読書カフェ」の試み

時には恥ずかしいことも

読書というのは基本的にはプライベートなことです。とりわけ強制されたものではない教養的読書では、自分の興味に従ってすきに読めばいいのだし、読後の思いを人に聞いてもらう必要もないのですから。人が本を読んでいることは外から見えるけれども、「どう読んでいるのか」「その人の中で何が起っているのか」は見えないのです。だから、自分の行ってきた読書について語るといことは、どこか恥ずかしい。しかし、少し低俗な意味でも、人には興味をそえられることかもしれません。

大学生協の京滋・奈良センターの教職員で組織されている教職員委員会では、教員がそれまでどんな本を読んできて、どんな感銘を受けて、いかなる影響を受けてきたのかということを、学生のみなさんが聞く機会意外と少ないのではないのかという話になりました。そこで、少しでも読書の面白さと意義とについて考える機会を作ろうと、この「読書カフェ」をはじめることにしたのです。話す者にとってはプライベートなことを外に出す恥ずかしい試みなのですが、少しでも何かを受け取ってくだされば意味はあるかもしれません。まだ五里霧中ですが、皆さまのご支援とご協力をいただければと願っています。

■『告白』との出会い ― 恩師の演習

表題の「〈私〉の歴史」の〈私〉は川添信介のことではありませんが。どんな人にとっても〈私〉がありますが、それぞれの〈私〉は異なっている。取り上げる書物『告白』の著者アウグスティヌスにも個別的な〈私〉があったはずですが、さしあたりはそのアウグスティヌスの〈私〉について述べてみたいと思います。最初にこの書物を岩波文庫版で読んだのは大学3年の時だったと思います。しかし、この本に出会ったと言えるのは京都大学の大学院に入って、山田晶先生がこの本を読む演習に参加した時だったと思います。もともとラテン語で書かれている『告白』をその原文で毎週少しずつ読む授業でした。学生・院生がその

こともしばしばでした。アウグスティヌスの他の著作、時にはまったく別の近代の哲学者の話に及ぶ週のアウグスティヌスを離れて『告白』の全体にさらにはアウグスティヌスの他の著作、時にはまったく別の近代の哲学者の話に及ぶ容面における解説が延々と続きました。しかもその説明は山田先生がその後に文法的に問題となるテキストの読み方、内ら、この学生の作業にはそれほど時間はかかりません。しかし、岩波文庫の訳文ではせいぜい2ページぐらいのものでしたか回のラテン語原文をまず音読した後に日本語に訳す。読む量は

このような山田先生「本の読み方」というものに、当時の幼稚な私は驚きました。そのように緻密に読むに値する書物があるということ、書かれていないことを知ったときに見えてくるテキストの持つ意味の深さ。それまではどれ程いいかげんに本を読んできたのかを思い知らされたのです。私は自分の大学の演習では今でも、山田先生には遠く及びませんが、同じようなスタイルを守っています。

■『告白』という書物 ― 西洋初の本格的自伝

この『告白』は「キリスト教神学者である著者アウグスティヌスの神様に対する告白」なのですが、全体の3分の2は4代になったアウグスティヌスが自分のそれまでの人生を振り返って、その人生に現れた神の恵みを讃美するものでもあります。

その限りでは、この書物は西洋の歴史の中で最初の本格的自伝と評べるものです（人生のおりおりの出来事に絡めてキリスト教の理論的な考察も豊富に含まれています）。

アウグスチヌスは紀元後354年に北アフリカに生まれ、修辞学の教師としてローマやミナで教え、387年にキリスト教に回心します。その後故郷近くに帰り、391年に聖職者となり397年頃から『告白』を書きはじめ400年ごろに完成させます。それから聖職者として説教をし、信者の世話をし、論争をし、数多くの著作を残し430年に没した人です。西欧のキリスト教思想の歴史の中では最大の学者の一人ですが、同時に公に「聖人」ともされているいわば「エライ人」です。

確かに偉人にはちがいがありませんが、『告白』の自伝的部分で面白いのは、キリスト教徒になるまでのアウグスチヌスのいわば遍歴です。そこにはそれほど「エライとも思えない」様々なことが述べられる。盗みをしたり、演劇にのめり込み勉強をおろそかにしたりしています。なかでも印象的なのは、16歳からある女性と同様生活をはじめ息子を待たのに、31歳の時に世俗的な配慮からこの女性を捨てたことでしょうか。大昔の異なった文化のなかでのごとくから現在の日本の基準で捉えるわけにはいきませんが、そう書められたことではないのは確かでしょうし、アウグスチヌス自身がこのことを痛切な想いをもって語っています。実は私自身も学生の時に早く結婚したこともあって、この物語は色々なことを考えさせられました。

たはずです。キリスト教徒になつたからといって、それで探究が終わつたわけではありませんでしたから。

■自分史の中の『告白』と哲学

先ほどは山田先生の演習という「出会い」を述べましたが、私はその後も自分でことあるごとに『告白』を読んできました。バリーに留学したときや大学の職についたとき、子どもが生まれたとときといった特別な場合に、「自分は35歳になっただけど、35歳のアウグスチヌスは何をして、何を考えていたのだろっ」というようにこの本は座標軸のような役割を果たしてきました。私は実はアウグスチヌスを狭い意味での哲学研究の対象としたことではないのですが、哲学を学んでいる者の一人として、常に「側にあつた書物」であると感じています。「自分とは何者なのか」を人生のそれぞれのステージにおいて考える場合に、山田先生によって導かれた『告白』の読書体験が決定的な役割を果たしており、私にとっての〈私とは何か〉の探究を決めてきたと感じるのです。私はキリスト教徒ではありませんが、哲

学という学びを支えてきたのがこの書物だったと言えます。

■〈私〉を見つめる歴史

このようにあまり「エライ」とは言えないような面をもついたアウグスチヌスでしたが、若いときからやはり並々ならぬ人間であつたことも読み取れます。最終的にキリスト教こそが真理であることも確信したわけですが、そこに至るまでの人生でもアウグスチヌスが「真実・真理」を追い求めていたことも確かなことです。ローマの哲学者キケロの書物を読んで真理探究を志し（ここにも読書体験がありますね）、マニ教という当時の或る意味合理主義的な宗教にのめり込んだり、その教えの不確かさに気づいて懷疑主義的になつたりという精神的遍歴を重ねるのです。その後、新プラトニズムと呼ばれる哲学の学派への傾倒（これも読書体験が発端でした）を経て、キリスト教の教え（これこそ聖書という「書物」「ことば」による宗教です）を真実として受け入れ回心したわけでは

この遍歴はアウグスチヌスの場合、〈何が真実か〉の探究であつたと同時に〈私とは何者か〉の探究でもあつたと言えると思います。人生のそれぞれの時に〈真実だとされているもの〉とは〈私に真実と見えてきているもの〉であつて、〈私とは何者か〉の理解に対応して真実の自身も変化したと言えるからです。また、『告白』の中では当然述べられていますが、『告白』を書いた後のアウグスチヌスの聖職者としての人生も、〈何が真実であるのか〉と不可分の〈私とは何者か〉の探究であつ

* その先の読書のために

『告白』は岩波文庫版（服部英次郎訳）もありますが、詳しい注釈と解説のある山田先生の『アウグスチヌス 告白』（中公パブリック）をお薦めします。岩波文庫ではアウグスチヌス後期の大作『神の国』も読めます。『告白』の親しむやすい紹介としては、やはり山田晶先生の含意深い『アウグスチヌス講話』（講談社学術文庫）と山田先生の演習とともに学んだ先輩である松崎一平さんの『アウグスチヌス 告白』（くわだしゅ）を語ること・・・』（岩波書店『書物誕生』シリーズ）をまず挙げておきたいと思います。

川添 信介 [京都大学文学研究科教授]



京都大学文学部を卒業。大阪市立大学を経て、現在は京都大学大学院文学研究科教授。最初はデカルトの哲学を学んだが、少し嫌気がさして西洋中世哲学に転向して、今のところ継続中。読書が趣味とはとても言えないのに、生協の読書推進になぜか関係している。モーツァルトとビトリカムをこよなく愛し、バツハと井上陽水の天才を畏怖する。



大作の読書は、教師について読むかせみ形式で読むか、どちらかのように思える。私の場合は森連一先生（田中美知太郎の弟子）と奥様が教師であった。森先生はギリシヤ語で読み、私たちは英語で読んだ。4年間かけて9巻まで読み終えた。毎週1度の読書で、読み終わると感想を話し合った。映画『イングリッシュペイシエント』はヘロドトスの『歴史』を下敷きにしている。主人公は『歴史』の始まりの物語を語るところから展開していく。重傷を負った主人公が最後まで身につけていた本は、やはり『歴史』であった。

■ヘロドトスとの出会い

作者ヘロドトスは小アジアの地中海に面したハリカルナッソスの出身である。東地中海世界を往来し、多民族社会を生きた博学者であり人間学の大家と言える。『歴史』はペルシヤの勃興からペルシヤ戦争の敗北までを鑑古に物語る。後半はペルシヤ対ギリシヤの戦争になるのだが、前半は東地中海世界の物語が延々と続く。当時はリティア、メダミア、新ヒロニア、エジプトの4大国がしのぎをけずり、やがてメダミアからペルシヤが独立するのだが、ペルシヤの初代キクロス王の出生談がエテニア神話より複雑で人間くさい。

■『歴史』の紹介と多様な民族

ペルシヤの初代キクロス、2代目カペピエセス、3代目タレイオス、4代目クセルクセスの紹介が東地中海世界の歴史そのものである。ここにはさまざまな民族がいて、さまざまな習慣をもっていたことを教えてくれる。例えば、エネトイ人の風習は持参金結婚であり、「嫁入りの年になつた娘を全部集めて、一所に連れて行き、一人ずつ売りに出す。一番器量の良い娘から始めて、順番にせりに出し、途中から一番器量の悪い娘もしくは身障者の娘に持参金をつけて売りに出すのである。つまり、器量の良い娘が器量の悪い娘もしくは身障者の娘に持参金をつけて嫁入りさせるのである。」

当時のエジプト人は豚を忌み嫌っていたようである。現在のイスラム教の豚タラーは昔に遡れるようだ。「豚はエジプトでは穢れた獣と考えられている。エジプト人は通りすがりに豚にふれるようなことがあると、着物をきたまま河へ飛び込んですっかり体を漬けてしまう。またエジプトでは豚飼いが、たとえ生粋のエジプト人であっても、エジプト内のどの神殿にも入ることができず、豚飼いは誰一人娘を嫁にやろうとせず、嫁をとることも望まない。」

2代目のカペピエセスはエジプトを征服するが、エジプトの宗教を禁止してしまう。ヘロドトスは王を次のように評価する。「実際にこの国の人間にでも、世界中の慣習の中から最も良いものを選んでいえば、熱慮の末誰もが自国の慣習を選ぶに相違ない。このようにどこの国の人間でも、自国の慣習を格段にすぐれたものと考えているのである。そうだとすれば、これほど大切なものを嘲笑の種にするなどと言つことは、狂人でもなければ考えられぬ行爲といえるであらう。」やがてカペピエセスは半狂乱状態になり、兄弟や臣下の家族まで手にかけ惨めな最後を迎える。ヘロドトスは、多民族社会を生きる国際人の一面も持っていた。

3代目のタレイオスはスキタイ遠征とリビア遠征を試みる。60万の大軍を引き連れて黒海の北まで遠征するのだが、スキタイの腹にはまり、命からがら帰国することとなる。スキロイ人は狼男の集団であり、アマゾン人は女のみ軍事集団である。なるはこの地は後世にスキュラの出身地になるところであり、風変わりな民族が多い。リビア遠征も成功とは言えないが、カルタゴ人

ペルシヤ戦争の前哨戦であるマラトンの戦い。「ペルシヤ軍はアナトイ軍が駆け足で迫ってくるのを見て迎え撃つ体勢を整えていたが、数も少なくそれに騎兵も弓兵もなしに駆け足で攻撃してくるアナトイ兵を眺めて、狂気の沙汰じゃ、全く自殺的な狂気の沙汰じゃと罵った。」しかしアナトイ軍は奮戦した。戦死者ペルシヤ方6400に対して、アナトイ方は1922という圧勝であった。ペルシヤ軍は、騎兵・弓兵・歩兵からなる大平原での戦いを想定しており、それに対してギリシヤ軍は重装歩兵のみであったことが分かる。

クセルクセスのギリシヤ遠征軍は30万を数え、史上最大規模を誇る大軍であった。しかしテルモピライでレオニダスに出陣をくじかれ、サラムイスの海戦では手痛い敗北をなめて、クセルクセスは臆病風にとらわれてしまう。サラムイスの海戦は東地中海の海洋民族フエニキア人とギリシヤ人のヘゲモニーをかけた戦いであった。ペルシヤの残留軍30万は年を越して、アナタニアの戦いで壊滅する。先日新聞で、日本人のお医者さんがアナタニアの場所を特定したことが報じられていた。ヘロドトス好きの読者も意外と多いのかもしれない。

思想史研究との出会い

丸山眞男の『日本政治思想史研究』

桂島宣弘（立命館大学文学部教授）



名和 文介

[同志社大学言文センター教授]

大阪外大で中国語を学び、同志社大学で中国語・中国文学などを教えています。授業ではヘロドトスと司馬遷などを比較して話すこともあります。最近眼を悪くし、読書の楽しみも半減しています。眼から口の楽しみに変わりつつあります。

* 『歴史』のおすすめ

学生時代に読んだ『歴史』は諸民族の多様な慣習に驚き、人間の歴史であり、表現されない神との対話であると感じた。改めたヘロドトスは人間学の大家だと確信した次第である。グレイトフックを読むことは人間の光と闇を知ることにもつながりそうだ。

■『日本政治思想史研究』との出会い

わたくしが最初にこの本に出会ったのは、1970年代半ばの頃です。立命館大学文学部の前に、某国立大学の工学部で学んでいた。高度経済成長が一息ついた時代です。そのような時代に、同じパートの隣の部屋に日本思想史研究室で助手をやっていた先輩が、理工系とは違った面白さを感じ、本を借りて読むようになりました。丁度就職活動で迷っていた頃。日本社会のあり方を考えるには良い本が沢山ありました。その先輩から薦められたのが、丸山眞男氏の『日本政治思想史』でした。「これを読んだら思想史研究がわかる」と。

■『日本政治思想史研究』の意義

丸山氏の本で有名なのは、『現代政治思想と行動』と『戦中と戦後の間』です。とりわけ『現在政治思想と行動』には、1946年、『世界』で発表された「超国家主義の論理と心理」という論文が入っています。この論文によって丸山氏は戦後を代表する知識人としての地位を確立します。この論文で触れているのが「無責任性の体系」です。戦争責任が問われたニルンベルグ裁判と東京裁判とを比較しています。東京裁判に並ぶ戦争指導者たちは、責任をとれるとみな横を見て、上を見る。責任をどううとしない。このような精神構造の原因を天皇制に求めるのです。そして、天皇自身も神武天皇以

読んでみると、「そのとおりだ」と思いました。この本は丸山氏の最初の論文を集めたものなのですが、これが丸山氏の研究の原点であり、エッセンスがすべて詰まっています。戦時に書かれたものなのですが、日本のものの考え方は、未だに前近代的なものの考え方を引きつっていると主張していました。私にとってはこの本がこれからの日本社会のあり方を示しているように見えたのです。「もっと勉強しないといけない」。そこで、その先輩に相談し、勧められたのが立命館大学日本史研究室でした。立命館大学には思想史研究の伝統があると。そして、日本の17、18世紀の思想史を研究しはじめ、現在に至っています。



来の「皇祖皇宗」を見る。結局、誰も責任を取らない。自分で判断して、行動して、責任をとる。日本にはこれがないと主張した高等学校の教科書にも取り上げられていた文章で有名なのは、「であること」と「すること」です。欧米では、人間の価値は「すること」によって決まる。しかし、日本は「何であるか」で価値が決まるとするものです。要するに、「書きよによって人間の価値が決まる社会では駄目だ」といいたいわけです。これも『超国家主義の論理と心理』と同じ論理です。みんなが上を見て、上のいうことは聞いてという無限の上下連鎖関係です。これが「であること。何かあった場合には「私は従っていただけです」「悪いのは上人間です」となるわけです。

丸山氏は、戦前と戦後の人文社会科学の属の要としての位置にたっていると思います。日本の思想史研究は、丸山氏をどう批判するのか、超えていくのか、補充していくのか、といったように丸山氏の論理からはじまっています。日本思想史研究は丸山氏によって成立したわけです。

■「思想構造」とは？

書名から判断すると、この本は日本の近代政治思想のことが書いてあると思う人が多いと思います。しかし、目次を見るとわか

社会科学には、大なり小なり、丸山氏の影響が数多く残されています。だからこそ、現在の日本の人文・社会科学系の学問を見直していくためにも、丸山氏を読むことが必要ではないかと思っています。

欧米やアジアの日本研究者の多くは、この本を読んでいます。英語版、中国語版、韓国語版、フランス語版も出版されています。それだけの影響力を持つ本です。だからこそみなさんにもお薦めするわけです。

現在の丸山真男論を知るためには、邦部直『丸山真男』（岩波新書）が一番分かりやすいと思います。丸山の思想軌跡がよく分かります。や専門的には子安宣邦『事件』としての祖継字（ちくま学芸文庫）が、丸山真男氏の救世祖像理解を根底的に批判しています。また、自分のもので恐縮ですが、拙著『自他認識の思想史』（有志舎）では、明治以来の日本思想史研究を、丸山真男氏を結節点として見通しています。この他、人文社会科学の方法論に興味のある方には、サイード『オリエンタリズム』（平凡社）を薦めます。丸山真男氏のもっている問題点か、実は近代学術自体の問題でもあることを考えさせられます。

* その先の読書のために

るのですが、書いてあることは朱子学、救世祖像、本居宣長の思想等。朱子学の特徴としては、道徳を核にしながら、政治、道徳、文学、あらゆる宇宙現象から人間の内面まで、鎖のように連続的に同じ原理でつながっているという構造があることです。これを前近代的思想と定義します。一方、救世祖像と本居宣長の思想は、この鎖を断ち切って、道徳等とつながらない政治や文学の独自の原理を主張している。丸山氏は、これを非連続的思想といっています。近代社会には、非連続的思想、自律した思想構造を背負った個人が出てくるはずであつたが、それが挫折をし、前近代的思想を引きずったまま、明治維新が行われ、近代日本が成立してしまつた。日本社会は前近代的な思想構造に引きずられた社会であり、それが天皇制や戦争責任をどうとしない思想にまでつながっていると主張されています。

■今でも大きな意味を持つ本

丸山氏については、様々な批判があります。救世祖像や本居宣長の思想に近代性を見ることが無理がある、ヨーロッパ至上主義、脱理論的な発想をすることに対してです。しかし、戦前、戦後の日本の人文・社会科学系の学問を構造的に集大成し、戦前・戦後の結節点に丸山氏がいることは間違いないわけです。日本の人文・



桂島 宣弘 [立命館大学文学部教授]

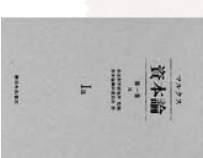
立命館大学文学部日本史学専攻卒業、同大学院修了。1995年から現職。妻が韓国の高麗大学の教員になっている関係で、毎月のように韓国に行っている。ただし、韓国語は初級段階で恥ずかしいくらいざり……。ともかく、今は韓国にはまっとうおり、思想史を東アジアから再検討することにチャレンジ中。趣味はやはり韓国ドラマの鑑賞。



資本の本来の姿がわかって
未来を展望できる

マルクスの『資本論』(第一巻)

上垣利博 (京都府立大学公共政策学部長教授)



■毎週、自主ゼミで読んだ『資本論』

カール・マルクスの『資本論』といえは、タイトルはよく知られているけれども読まれることの少ない本の代表ですが、アダ・スミスの『国富論』と同じく実際に読んでみると実に興味深いことが書かれています(『国富論』については、スミスを「人間の経済学」の理論家として紹介した拙稿「アダム・スミスと生活経済思想」・小野秀生編『生活経済思想の承譜』青木書店、1996年所収、を参照)。

版の序文では、「吾問には平坦な大道はありません。そして、学問の険しい坂道をよじ登る苦勞をいとわないものだけに、その明るい頂上にたどりつく見込みがあるのです」とも。しかしながら、この言葉に勇気づけられて、第1章「商品」から読み始めると、途中で挫折してしまう可能性が高くなるようです。

当時、京都大学の池上惇先生などが集まられた基礎経済科学研究所(基礎研)では、第8章「労働日」から読むことを勧めていました(島恭彦監修『講座現代経済学』全6巻、青木書店、1978~79年など)。続いて、第11章「協業」、第12章「分業」とマニファクチュア、第13章「機械と大工業」、第23章「資本主義的蓄積の一般法則」、第24章「いわゆる本源的蓄積」という歴史的な叙述を多く含む諸章へと進むのです。

例えば、第8章には有名な、「われどきあとに洪水は来たれ!」これがすべての資本家、すべての資本家国の標語なのである。だから、資本は、労働者の健康や寿命には、社会によって顧慮を強制されないかぎり、顧慮を払わないのである」という叙述がありますが、21世紀の日本での新自由主義の主張(小泉・竹中「改革」路線)への批判としても肝要な点です。

■『資本論』が明らかにしたこと

マルクスが明らかにしたかったのは、資本主義のもとで労働者

私は1974年に京都府大の文学部に入学しましたが、当時は「自主ゼミ」といって、正規の授業ではなくて単位にもならなけれど、週に1回集まって『資本論』などを読むサークル活動が盛んでした(まだ「コンシューミアム」のような機構はなかったのですが、他大学の講義をモクワで聴きに行く「ニセ学生」はいました)。73年に府大の女子短大部生活経済科に赴任された小野秀生先生にチャーターをお願いし、学部4年間で『資本論』の「第一巻」を3回「第二巻」を3巻「第三巻」を1回、通して読む機会がありました。

文学部の歴史や社会福祉の学生の他にも農学部などから10名程が参加していました。ゼミの運営では、①「よくわかりません」ではなく、どこがどうわからないか問題を提起する力をつけようとか、②「どなたか意見はありませんか」と言わずに司会者が自らわかるようにする努力をしよう、③「みんなで深めましょう」も禁句で個人の学習や努力をあいまいにしないように、といったことが留意されていました。

■『資本論』の読み方 ―歴史的諸章から読む―

マルクスは『資本論』の第1版序文で、「私が予想している読者は、何か新しいことを学ぼうとし、したがってまた自分自身で考えようとする人々である」と述べています。さらにフランクフルト

階級は貧困化するので団結して革命に立ち上がるという「窮乏化革命論」ではありません。第1版序文でも、「資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的な敵対関係の発展度の高低が、それ自体として問題になるのではない」と言っています。そうではなくて、「今日の支配階級は、労働者階級の発達を妨げる障害のうちで法律によって処理できる一切のものを除去すること、まさに彼ら自身の利害関係によって命ぜられている。それだからこそ私は、ことにキリスト工場立法の歴史、その内容、その成果には、本書の中でどのように詳細な叙述のページをさいたのである」と述べているような、「近代社会の経済的運動法則」なのです。

その核心は、「大工業は、いろいろな労働の転換、したがってまた労働者のできるだけの多面性を一般的な社会的生産法則として承認し、この法則の正常な実現に諸関係を適合させることを、大工業の破局そのものを通じて生死の問題とする」という点です。つまり、「一つの社会的細部機能の担い手でしかない部分個人」の代わりに、「いろいろな社会的機能を自分のいろいろな活動様式としてかわるがわる行うような全体的に発達した個人」をもつて来ざるをえないということです。実に、興味深い指摘です。

■人間発達と人間の「自由」

マルクスは、「資本主義社会では、大衆のすべての生活時間が労働時間に転化されることによって、ある一つの階級のための自

読書カフェ VOL.1

menu

第1回

〈私〉の歴史 アウグスティヌスの『告白』

語り手 … 川添 信介 [京都大学文学研究科教授]

- 日 時：10月28日(木) 16:30～19:00
- 会 場：京都大学 吉田泉殿

第2回

地中海的世界 ヘロドトスの『歴史』

語り手 … 名和 又介 [同志社大学言文センター教授]

- 日 時：11月18日(木) 16:30～18:30
- 会 場：同志社大学 アーモスト館

第3回

思想史研究との出会い 丸山真男の『日本政治思想史研究』

語り手 … 桂島 宣弘 [立命館大学文学部教授]

- 日 時：12月16日(木) 16:30～19:00
- 会 場：立命館大学 末川会館レストランカナルム

第4回

資本の本当の姿がわかって未来を展望できる マルクスの『資本論』(第一巻)

語り手 … 上掛利博 [京都府立大学公共政策学部教授]

- 日 時：1月27日(木) 16:30～19:00
- 会 場：京都府立大学 生協食堂

*その先の読書のために

『資本論』そのものを読むことをお勧めしますが、糸口として、内田義彦『読書と社会科学』『資本論の世界』(いずれも岩波新書)、基礎経済科学研究所編『時代はまるで資本論』(貧困と発達を問う全10講)(昭和堂、2008年)同『めとり社会の創造』新資本論入門12講(昭和堂、1989年。第9講「資本蓄積と不安定化する雇用形態」を書きました)などを参考に、『資本論』の翻訳で新しいのは、今村仁司他訳(筑摩書房、マルクス・コレンツィョン、2005年)、資本論翻訳委員会訳(新日本出版社、1997年)です。古くは『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店)ですが、岩波文庫にもあります。

由な時間がつくりだされる」というように問題を把握して、労働が「すべての労働能力ある社会成員」のあいだに均等に配分されていれば、「個人の自由な精神的・社会的活動のために獲得される時間」は大きくなります。このようにマルクスは、『資本論』を通じて、「労働日」(一日あたりの労働時間の短縮に着目して人間にとっての自由、「自由時間」の意味を解明し、労働と教育を通じての人間発達の可能性を展望しています(それは、労働者だけではなく、資本家にとっても人間性を回復する道なのです))。



上掛利博 [京都府立大学公共政策学部教授]

1954年、北九州の川端(やはた)の生まれ。京都府立大学文学部(社会福祉学科)を卒業後、経済学へ転身。岡山大学大学院、立命館大学大学院 経済学研究科博士課程を経て、1987年から母校へ。社会福祉施設、老人福祉施設などを担当。北阪ノルカエーの社会や人々の生き方に関心を持っています。「京都生協」の理事を10年務めたほか、「くらしと協同の研究所」の研究委員会代表、「京都府立医科大学・府立大学生協」の理事長です。学生時代は混声合唱団のBassで歌っていました。最近見て気に入った「本つながり」の映画は、「いつか読書する日」(田中裕子、岸部一徳)、「ショーン・ベッカーの空」(ティム・ロビンス、モーガン・フリーマン)、「父と書せば」(井上ひさし原作、宮沢りえ)など。





2010年6月6日発行

発行・大学生協 京滋・奈良地域センター

〒606-8106 京都市左京区高野玉岡町 23-3 TEL : 075-712-1156